

岩内と共和を核に オール後志を 笑顔でつなげ行動する人

石塚 貴洋 (いしづか たかひろ) さん
石塚水産代表、星景写真家、1972年岩内町生まれ。



北海道に移住（U・I・Jターン）して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地域プロデューサーのかとうけいこさん。17回目となる今回は、岩内町を含めた後志エリアで新たな観光資源の開発や人的ネットワークづくりを進めている石塚貴洋さんです。

Uターンして家業を継がれたのですね

戻ってきたのは2008年ですね。それまでは水産加工に関わる意思はなかったです。札幌の大学に進み、在学中に組んだGashでメジャーデビュー（当時のエピックソニーと契約）し、大学卒業後に拠点を東京に移しました。バンドは2005年に解散。その後はソロ活動や作詞、プロデューサーの仕事をしていました。そんなときに父親が体調を崩しました。2007年だったと思います。それからしょっちゅう東京から戻ってきて父の仕事を手伝い10日ぐらい岩内で過ごす、そんな二重生活を半年以上も続けました。

高校、大学時代の岩内にはもっと活気があったな。戻ってみて、寂れてしまったと感じました。漁師町特

有のパワーがあったはずなのに、それがなくなっていました。

地域と関わるきっかけは何だったのですか

倶知安観光協会主催の「夏のニセコサマーステイスティイベント2015」に岩内の観光協会の一員として物販やイベントの手伝いに行きました。会場では岩内の他に積丹、仁木、余市からも同年代の元気な人が来ていて。水産業以外の同世代とも繋がりネットワークが広がっていきました。「地域と関わって地域のために何かするのって楽しいな！」と思うようになったのはこの辺りだったと思います。

そして、隣町共和町のレストハウスの管理を頼まれた？

神仙沼しんせんの休憩所を運営していた人がやめることになり、引き継いでやってみないかという話がきました。2017年ですね。ハード面の条件が悪くなくて周りの誰からも赤字になるからやめたほうがいいと言われてました。でも僕、神仙沼が好きだったんです。まだ小さかった息子を連れてピクニックによく出かけていました。そこで出会った人たちは自然が大好きな人が多く、レ

ストハウスに集う人が作り出す時間を守りたかった。そこを自分が手がけるのは、腑に落ちた、つじつまがあったという感じでした。それと、無理だよ！難しいよ！と言われると、逆に「だったら自分がやってみよう」と思う性分もありました。

もう一つの理由は、岩宇広域連携（岩内町・泊村・神恵内村・共和町の4町村）のスタート時期とも重なっていたことです。自分は観光部会の部会長でもあり、神仙沼を盛り上げていけば、岩内町と共和町の連携が加速するかな？という思いもありましたね。

写真コンテストで凄い賞を獲られたとお聞きしました

ビクセンという天体望遠鏡メーカー主催の星空フォトコンテスト2020年でグランプリに選ばれました。4年前に共和町から神仙沼のレストハウスの管理を頼まれて、星空の美しさをアピールしたいと考えました。この場所は特別だと知りました。そのきっかけは「光害マップ」というサイトとの出会いでした。

「光害マップ」とは？

美しい星を見たり撮影したりするためには、周りの光がないことが大切になります。日本全国の情報を集めたサイトなんです。後志地区では神仙沼と島牧村のキャンプ場2か所だけが、最高の条件を持つ場所だと知りました。「それは神仙沼の売りになる！」と確信して見に行くことにしました。暗闇の恐怖と期待でドキドキしながらたどり着くと、綺麗な星空が広がっていました。一緒に行ってくれた役場の仲間とすげ～すげ～って興奮したのを今もはっきり覚えています。次の年、今度は一人で、頭にヘッドライトをつけて、神仙沼の奥まで行ってみました。真っ暗な木道を30分かけて…。すると、息を飲むような満天の星が広がっていました。こりゃ～やばいわ！！って声が出ましたよ。

写真は独学で始められたとか

はい。やると決めると夢中になるタイプです。本気でカメラに向き合うようになりました。インスタで星空撮影のすごい技を持っている人にダイレクトメッ



ビクセン星空写真コンテスト「第一回 それぞれの宙を見上げて」
グランプリ受賞作「A Comet In The Mirror」(2020年 神仙沼で撮影)

セージを送り、教えていただきとにかく撮影しました。星空の撮影はすっかりライフワークになりました。ビクセン星空フォトコングランプリをいただいた2020年は驚きました。スペシャリストと繋がり、星空を見ることを目的にした旅人も数多く出会えるのが嬉しいですね。地元で暮らしている者しか撮れない自然条件が揃った写真を、神仙沼から発進し続けていきたいと思っています。

(2022年7月取材)

インタビュー後記

本業でも、^{えぞあわび}蝦夷鮑の塩辛やアヒージョなど、ヒット商品を開発。全国のデパート催事などでミュージシャン時代に身に着けた“ライブで伝える力”でファンを獲得し続けている石塚さん。海も山も歩いて行ける“暮らしと自然の距離が近いまち岩内”に東京時代の友人や凄腕カメラマンを招き、満足してもらい情報発信してもらっていること含め、本当に素敵な方です。

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表